

分解作業と自棄をおこす虎

文木枝麗



愛のおこぼれにすぎらなければ、生きてはゆけません。

みじめでみじめで、生きてゆけないほど辛くなければ、生きてはゆけません。



夢みたいだと思ったの。

しっかり感触のある、夢みたいだと思ったの。

昼と夜が姿をかえて、聞えないものが聞えても、醜いばかりのけものになってしまっても。

悪夢に落ちる夢をみながら、涙を流しながら。

あたしは心底しあわせだと言わずにいられなかった。



溶けやすいものを吐き出します。

どちらかといえば、夜に溶けやすいものを吐くのが得意です。

朝はあたしにとっても気難しいから、朝に溶かすものには、どうも慎重になります。



くうを漂うようでした。

かなしいこともうれしいこともなくなりました。

ぶつかることも出来ず、わずかな空気の揺れのままに。

天国も地獄もありません。

北も南もありません。

愛も憎しみもありません。

いよいよあたしも、あってないようなものになりました。



こころが小刻みに揺れて落ち着かないようです。

揺れる度に少しずつ、あたしは中から分解されて。

なにものにとっても無害な物質になって、息をする度、世界へとび出します。

そのさいごは、傍目には潔いものかもしれません。

まるで、こう、と決めた瞬間に、失せてしまったように見えるんですもの。



鏡はほんとうを映してはくれません。

だれもかれも、鏡の中のあたしを見ているのでしょうか。

あたしはもっともっと、醜いはずです。

まったく、ぜんぜん、違う人間のはずです。

こんなあたしは幻想に違いありません。

触れたら途端に破れて、汚いものがあふれ出すに違いありません。

色もないのに汚いものです。

ほうら、あたしはこんなに汚らしくって醜いの。

そう言えたら、はじめて心の底から笑えるでしょう。

ただ、触れる術を持たないから、証明することはできません。

ただ、それが口惜しいのです。



ほしいものにも、ほしくないものにも、焦がれずにはられません。

どちらも、うつくしいのです。

うつくしいから、うつくしすぎるから。

どうしても手に入れたいものは、手に入れた瞬間に気化して、あたしを貶めます。

憎むことしかできない、どっしりとした脱け殻が残るのです。

そんな風にしてしまったあたしが、世界一の悪者です。



息をすることと、信じるのが同じことだった頃。

生きてゆく方法を知らなかった。

死んでゆく方法を知らなかった。

何かを信じているあたしという人間を、知らなかった。

あの頃、あたしはこの世界に存在しなかった。

あの頃、あたしはたしかに生きていた。



涙のレシピをご存知ですか。

あたしは時折、忘れてしまいます。

なにか、あとひとつ。

きらりと光る、そう、あれ、あれは何だったかしら。

なまぬるいこのハートにあれさえあれば、大粒の涙が出来上がるのに。



美しいだけの世界は、届きそうで届かない、そう錯覚出来るくらいにとおくとおく、時折。
蜃気楼のように、ゆらりと現れては、ゆらり、消えておくれ。



死にたくはない、と。

しわだらけになっても、ベッドの上で。

言葉にすることも叶わず、誰かにすぎることも叶わず。

身動きひとつできない身体で必死に叫んでいた。

あたしは、その姿を知っているのに。

その過ちも知って、その後悔も知っているのに。

全て抱えたその身体で、ひたすら涙を流した姿を、あたしはみたのに。

今日もあたしは溶けだした。



溶け出せたら、どれほど美しいか。

数えきれない可能性を秘めた、どんな悪意もない存在となって。

そう、たとえば。

次は道端に咲く小さな花になれないものでしょうか。

来世はあります。たくさん、たくさん。



ただあるだけでしあわせを与えられるというのは、どんな気持ちなのでしょう。

ほんの一瞬、表情を曇らせただけで、かなしみに気付いてもらえるというのは、どんな。

生きようともがく姿を、嘘で塗りたくっていることを、心の内でわかってもらえるというのは。

わかりやすいものだけが真実ならば、あかしだけでなく。

あなたにも新しい世界はやってこないのだと。

そう思いながら、それでもあかしが惨めなのは、やはりあなたが。

あかしの世界のすべてだからでしょうか。



あたし、自分を卑下してるつもりはないんです。

あたしは、こんなあたしでも、心底あたしを愛しています。

良いところがあるとは思いませんけれど、それでも愛しい。

あたしがあたしを悪く云うのは、それでも愛して欲しいからです。

いけないあたしを、それでも好きで堪らないと言って欲しいからです。

きたないものに溺れたあたしを、それでも抱きしめて欲しいだけです。

あたしは変わってゆくでしょう。それでもあたしは愛するでしょう。

いつかきれいになる日も来るかもしれません。

あたしが望んでいるのは、ありきたりな、ひとつの愛情でしかありません。



愛が生まれた日

喜びが生まれた日

笑顔が生まれた日

生まれなかったものたちが、生まれました。

涙を流さずにはいられない喜びを知ったとき、この世に生まれたかなしみを知ります。

最大の不幸を知ったとき、きっとあたし、誰より幸せになれるんだわ。



あたし、あなたになりたいのかもしれない。

あなたの考えを知り

あなたの隠した夢を知り

あなたが誰かを想う、その愛の色を知り

あなたが嫉妬するその醜さを知り

あなたが心を焦がす瞬間の苦しみを知り

あなたの色のままに、熱のままに、あたしあなたを感じたいのです。

全てあなたが感じるままに、あたしも感じたい。

そしたらあたし、望み通り消え去って。

この世で一番愛しいものになれるのに。



かわいそうな、あたし。

とやらをあたしは知りません。

涙を流すあたしは、かわいそうかしら。

理解されないあたしは、かわいそうかしら。

嘲笑されるあたしは、かわいそうかしら。

あたしが可哀想なあたしに出会うのは、骨の髄まで奪われてから。

あたしが出会う可哀想なあたしは、他人の中に生きています。

今のところ。

答なんか突っ返してやるよ。

答なんかに甘んじてたまるか。

答なんかに目が眩んで、考えることをやめてしまったら、あたしはもう生きてない。

あたしの生きてく意味はそこにある。

「あたしは一体何なの」

「あたし何のために生きてくのかわからない」

そうやって嘆いて悩んで苦しいともがき考え続けることに意味がある。

「消えたい」

そう口にするだけで生きてゆく。

穏やかな日々なんかいらないよ。

何でもない顔をして、あたしは。

幸せそうに笑って、あたしは。

孤独の思考を躍らせ生きてゆく。

なんて楽しい人生か、負の叫びはいつだって快樂なもの。

生きてゆくということは、宇宙とセックスをすることだと君は言った。

「気持ちの悪いことを言うのね」

あたし言葉を知らないから、そうやって言うしかなかったの。

教えてほしいのよ。

死んでしまった君に、一生をかけたセックスの感想を。

自分で死んだ君は、セックスに飽きてしまったのかな。

あたし、今では思うのよ。

死んだって、この交わりは続くんだって思うのよ。

あたしたち、一度だって一つになったことはないけれど。

あたしたち、いつだって一つだった。

これは慰めかしら。

君をなくした、あたしへの慰めでしかないのかな。

本当のことなんてわからないから、ちらつくかなしみを見ないふりをして。

あたしは今日も、君とセックスをする。

泣いたらいい

大勢の前で泣いたらいい

みんなは笑うふりをして

誤魔化して

可笑しいようなふりをして

見るかもしれない

そしてうちへ帰ってひとり

君の真似をしてみるんだ

誰ひとり、君のように泣けやしないから

また君を笑うかもしれないけれど

君は構わず泣いたらいい

いつか誰かが君のように涙を流したら

知らない心を抱きしめ合って

ひたすらあたしたちに無関心な世界でも

報われないまま愛して行って